

# ハイエクとシカゴ学派——方法論と自由主義——

江 頭 進

## I はじめに

本稿の目的は、F. A. ハイエクの経済思想とミルトン・フリードマンを初めとするシカゴ大学の人々の関係を考察することにある。ハイエクは1950年から1960年までの間、シカゴ大学社会思想委員会に所属していた。この時期が、理論経済学者から自由主義思想家へのハイエクのいわゆる「転換期」であることは既に知られている。したがって、この時期にハイエクがどのような人々とどのような議論を重ねたかを知ることが、ハイエク思想の発展を考える上で重要な意味を持つ。

ハイエクの自由主義と、フリードマンに代表されるシカゴ学派の自由主義は、共通点と相違点がこれまでも指摘されてきた。ハイエクとシカゴ学派の経済学者の幾人かは、自由主義者の国際団体であるモンペルラン協会の主要メンバーであり、共に共産主義の脅威と戦った盟友であった。にもかかわらず、ハイエクとフリードマンは貨幣政策に対する見解がまったく異なるし、政治団体化していくモンペルラン協会からハイエクが脱会を考えたこともあるなど、考え方の違いを示唆するいくつかの事実がみられる。

本稿は、シカゴ大学在籍期間に発表されたハイエクの著作とこれまであまり採り上げられてこなかった書簡などを活用しながら、シカゴ大学の経済学者たちとハイエクの影響関係を探る

ことを目的としている。加えて、ここでは両者の自由主義だけでなく、社会科学方法論の相違にも言及する。フリードマンは、経済学を自然科学と並び立つ科学とするために、経済学に対して「実証性」あるいは「予測可能性」を要求した。他方で、ハイエクは、社会科学と自然科学の方法が別個のものであり、社会科学は独自の方法論を持つべきであるとした。この両者の違いが、自由主義者としてともに世界をリードしながらも、ハイエクとフリードマンが最後まで折り合えなかった一つの理由でもある。

ハイエクが籍を置いた社会思想委員会の主催する研究会に一時的にでも参加したメンバーは、社会学者だけでなく、物理・化学者マイケル・ボラニーや物理学者エンリコ・フェルミなど多岐にわたり、その中には、後にノーベル賞を受賞した研究者も多数名を連ねている。1950年前後にいくつかの方法論的著作と認知的科学的著作を発表していたハイエクに対して、これらの非社会学者との議論が与えた影響は小さくないと思われる。また1960年に発表された『自由の条件』は、ハイエクが自らの自由主義思想の基礎として進化概念を初めて本格的に導入した著作であり、シカゴ大学時代のハイエクの研究の集大成でもあった。

シカゴ大学に所属した期間はハイエクにとって彼の研究者人生の中でもっとも生産性が高かった時期であるにもかかわらず、そして、ハイエクとシカゴ学派の経済学者はモンペルラン

協会を拠点とした自由主義者として同列に扱われるにもかかわらず、両者の関係を明示的に取り扱った研究は少ない。伝記的には、ハイエク自身の自伝である『ハイエク、ハイエクを語る』(Heyek 1994)、エーベンシュタインによる著作(Ebenstein 2001; 2003)がシカゴ時代のハイエクの人間関係を部分的に表している。また両者の関係を直接示したわけではないが、オーストリア学派とシカゴ学派の方法論および自由主義の違いを明確に取り扱ったものとして、バリー(Barry 1986)が以前から知られている<sup>1)</sup>。入念な文献調査をおこなったヘネッケは、1950年代を自由論形成のために重要な時期であるとしながらも、シカゴ学派との関係は特に採り上げていない(Hennecke 2000)。

他方で、前期ハイエクの経済理論とシカゴ学派のつながりを指摘するものはいくつか見られる。特にルーカス自身がリアルビジネスサイクル理論の先駆としてハイエクを採り上げたため、ハイエクの1930年代の経済理論研究に見られる異時点間均衡を前提とした景気変動論とルーカスらの関係を指摘する研究は少なくない(Caldwell 1988; 2004, Butos 1985, Rosner 1994)。ただし、そのような中でもウィット(Witt 1994)は、ハイエクの前期理論における均衡概念が、ルーカスらのシカゴ学派の人々に再評価されたのは確かだが、その評価を受け入れてしまうと、ハイエクの方法論や自由主義論で展開した概念とは矛盾が生じてしまうことを指摘している。

ハイエクとシカゴ学派は、方法論的に異なっていることはしばしば指摘されるにもかかわらず、反社会主義、反ケインズ主義あるいは新自由主義者としてはひとくくりになされてしまうことが少なくない。だが、方法論が異なれば経済学が異なるのは当然であるし、彼らの自由論が経済学に立脚しているとすれば、自由論が異なると考えることは不自然ではない。彼らの自由論の持つ意味がますます大きくなっている現代

において、この差異を確認しておくことは重要であると思われる。

全般的にハイエクとシカゴ学派の関係に関する研究は厳密な根拠に基づいているものがあまり見られないと思われる。そこで本稿では、スタンフォード大学フーパー協会などのいくつかのアーカイブに所蔵されている資料を用いながら、当時のハイエクの知的環境を分析し、ハイエクとシカゴ学派の方法論と自由主義思想の相違を明らかにしていく。

本稿では、三つの軸によって議論を進めたいと思う。第一に、社会思想委員会でのハイエクの交流関係、第二に、J. S. ミル研究から、*The Political Ideal of the Rule of Law*, 1956 を経て、『自由の条件』へと進む自由主義研究、第三に、フリードマンやスティグラールといった他のシカゴ学派の経済学者との関係である。なお本稿では、主に方法論と思想の関係を論じ、方法論と理論の関係は中心的には採り上げない。これは、本稿はハイエクがシカゴ大学に在籍した時期に焦点を当てているためであり、ハイエクは当時既に経済理論研究から手を引いていたからである。ただし、ハイエクが経済理論研究をしていた時期に既に方法論的な特徴が現れていたことから、必要に応じて手短かに言及する。

## II 社会思想委員会と1950年代のハイエク

ハイエクは1950年10月6日、住み慣れたイギリスに別れを告げリバプール港からアメリカに向けての移住の旅に出た。形の上ではシカゴ大学の招聘を受けるためという名目があったが、実際にはケインズの『一般理論』の登場、『資本の純粹理論』の不発、そしてウィーン時代から連れ添った妻ヘラとの離婚と幼なじみのヘレネ・ビッテルッヒとの再婚といった諸事情が、彼のイギリスでの立場を微妙なものにしていたからであった。しかも、彼が招聘されたのは、伝統あるシカゴ大学経済学部ではなく、特殊な組織であるジョン・ネフ社会思想委員会であっ

た<sup>2)</sup>。

社会思想委員会は、1941年にフランク・ナイトおよび歴史学者のジョン・ネフ (John Nef)、人類学者のロバート・レッドフィールド (Robert Redfield)、ロバート・ハッチンス (Robert M. Hutchins) によって設立された。委員会という日本語のイメージするものとは異なり、この組織は、きわめて学際的な研究組織でありかつ教育機関でもある。一時的にでも所属した著名な研究者の中には、政治学者アーレント (Hannah Arendt)、文学者でソール・ベロー (Saul Bellow)、小説家で反アパルトヘイト運動家ジョン・コッツイー (John Coetzee)、作家で宗教学者のエリアーデ (Mircea Eliade)、劇作家のエリオット (Thomas Stearns Eliot)、歴史家のコラコウスキー (Leszek Kolakowski)、人工知能研究家のローゼン (Charles Rosen)、社会学者のシルス (Edward Shils) の名前が挙げられる。また、フリードマンやスティグラールはメンバーではないが、委員会の会合には何度も出席していた。

当時の大学院生<sup>3)</sup>が残したレポートによると、社会思想委員会は、ヨーロッパやアメリカの学界では失われてしまった高度教育のための小規模組織であり、(1) 既存の大学の学部分けや分野分けからは独立した創造的研究のための自由と、(2) 学部横断的な特別なトレーニングを小規模の学部で受けられることが約束された大学院生のための自由を守り、(3) これらの自由の利益を得るために広義での哲学、芸術、歴史を理解することを可能にするようなコア・スタディを受けられる機関であるとされている。

ハイエクはこのポジションが彼にとって非常に好都合であることにすぐに気がついた。理論経済学からより広い分野に関心を移しつつあったハイエクにとって、多様な分野の研究者との交流はきわめて刺激的であった。ハイエクは、毎年3,4人の大学院生の指導をしつつ、社会科学に関するセミナーを主催した (Committee on

Social Thought 1950)。ハイエクは、このセミナーを、内外からゲスト研究者を招待し、大学院生にも解放した空間にしようと考えていた (Hayek 1950)。しかも、方法や視点は違うとはいえ、メンバーの思想が反共産主義 (反全体主義) であったことも、『隷従への道』発表後、モンペルラン協会を設立し、自由主義者としての道を歩みつつあったハイエクにとって好環境であったと言える。

就任後の数年間にハイエクが行ったもののうち、タイトルがわかっているのは、

- (1) Equality and Justice (就任講義, 1950年12月)
- (2) The Liberal Tradition (講義, 1951年)
- (3) Scientific Method (セミナー, 1952冬学期)

の三つだけであるが、これらはハイエクのシカゴ大学時代の中心的な研究対象であった。(3)は、直前に刊行された論文「科学による反革命」を元にしたセミナーであり、大学院生は履修単位に関係なく参加する形のものであった。このセミナーでは、ハイエクは社会科学だけでなく、学内の歴史家や物理学者、生物学者らにも広く声をかけて参加を促し、社会科学と自然科学の方法論の違いを示そうとした (Hayek 1952c)。このようにシカゴ時代のハイエクの研究は、自由論と方法論研究に集中している。

ハイエクは、主に1950年代の前半期を方法論研究に費やし、後半期を自由論研究のまとめに使った。もちろん、方法論研究は、彼の経済干渉主義批判の基礎となる合理主義あるいは設計主義的思想への批判を固めるものであり、自由論と独立したものではない。しかし、実際の議論は自由主義を除いたとしても成立する哲学的な議論であった。

だが、これは他方で、ハイエクがシカゴ大学の人々からはもはや一般的な経済学者としての能力を期待されていなかったことを示してい

る。フリードマンは、かなり辛辣に次のように回想している<sup>4)</sup>。

私は、ハイエクのことを非常に尊敬していますが、それは彼の経済学のことではないということは強調させてください。…私は彼の経済学の理解、すなわち彼の経済学の実際の世界への適用といったもののことではなく、経済科学に対する彼の貢献について言っているのです。私は、『価格と生産』は欠陥だらけの本だと思っていますし、彼の資本理論の書籍は読めたものではありません…。(Ebenstein 2003, 140)

実際、社会思想委員会のセミナー上で、ハイエクの景気変動論や資本理論が採り上げられることはなかったし、ハイエクもそれを希望することはなかった。社会思想委員会に属した12年余の間に「経済理論家ハイエク」は完全に沈黙することとなった。

他方で、このセミナーでは実証主義を掲げるシカゴ学派の経済学者とも方法論的な論争を繰り返していた。ハイエクはその生涯を通じて、社会科学における経験主義を批判しておりそれはこの時期も同じである。

ハイエクは、1955年に妻ヘレネとの長期の地中海旅行を行っている。それは当時ハイエクが学史的な研究をおこなっていたJ. S. ミルとハリエット・テイラーの新婚旅行の旅をなぞるものであった。この途中、エジプト銀行の招聘を受け、カイロでおこなった講演が、“The Political Ideal of the Rule of Law”である。ハイエク自身の回想によると、ハイエクは当初ミルの自由論を高く評価していたことからミル研究をおこなったが、次第にミルがハイエクの言う「偽の個人主義」に属する人物であることがわかり批判的になったとしている<sup>5)</sup>。ハイエクの個人主義論が、設計主義あるいは合理主義批判であることを考えれば、ミル研究が、この時期の方

法論研究と直結していることは容易に理解できるだろう。この“The Political Ideal of the Rule of Law”は、翌年小冊子として刊行され『自由の条件』の一節として取り込まれることになる。

このように、この時期のハイエクとシカゴ学派は、同じ大学の中にはいながら、経済学部と社会思想委員会というやや隔たった空間で、基本的に独立して行動していたようにも思える。しかしそれは、ハイエクに対してシカゴ学派的な実証主義が何の影響ももたらさなかったことを意味するのだろうか。反対に、もし両者の間に違いがあるとすれば、その違いにもかかわらず、彼らは同じ範疇でひとくくりにされるのだろうか。立脚する経済学が異なれば、そこから生み出される自由主義も異なった視点を持つことになる。次節からは、方法論—経済学—自由主義というつながりを検討しながら、ハイエクとシカゴ学派の相違を明らかにしてみよう。

### III 社会科学方法論

社会思想委員会にハイエクが所属した12年のうちの前半期の彼の興味は、自由主義論と科学方法論にあったが、その重心は主に方法論の方にあったようだ。特に、ここでのハイエクの関心は、自然科学と経済科学の方法論の違いを強調することにあった。これは彼が『隷従への道』で提出した自由論をより発展的に展開する場合に、その基礎として国家社会主義の背景にある設計主義を批判する必要があったためである。そしてその誤った設計主義を生み出しているものこそが、社会科学における自然科学の模倣であった。

1952年当時のハイエクがメンバーに宛て出した委員会のセミナー関係の書簡をみると、自然科学と社会科学の方法の違いについての議論が中心であることがわかる。たとえば、傑出した物理学者でマンハッタン計画の中心人物であったフェルミに宛てて出した研究会参加の招待状の中では、次のように述べている。

物理学において、尺度とそれを可能にする条件は問題だと思えます。ある意味、それはセミナーでの議論の究極の課題なのです。なぜなら、「科学は尺度である」という信仰は、物理学モデルの影響が革新的なものだからであり、多くの点で社会科学に対して誤解を与えやすい影響の中心的なものだと私が考えているからです。(Hayek 1952a)

周知のようにハイエクは、『科学による反革命』(1952e, 該当部分の初出は1941-42)の中で、主観的科学である社会科学は、客観的科学である自然科学とは区別されるべきものであると主張した。

ハイエクが、社会科学における客観主義を批判したのはこのときだけではない。「科学主義と社会研究」(Hayek 1942-44)の中では、物理主義および行動主義に代表される社会科学の中の客観主義が、観察できる事象のみに注視し、その事象を生起せしめている構造をブラックボックスに入れたままにしてしまう傾向があることを指摘している<sup>6)</sup>。これはハイエクがケインズやフリードマンに向けた批判と同じであった。この点は少し後で検討する。

この主張は、社会思想委員会内で彼が主催したセミナーの中心議題でもあった。ハイエクがここまで自然科学と社会科学の方法論の違いにこだわったのは、社会現象に対して自然科学的アプローチを採ることが、彼の目には理性の濫用と映ったからである。社会主義経済計算論争以来のハイエクの主張では、社会現象に対する自然科学が立脚する合理主義的アプローチには限界があるだけでなく、有害であると考えていた。なぜなら、社会を支える様々な要因の多くは理性的にはその存在理由や意味が理解できないような様々な知識から成り、その多くは科学の俎上に載る性質のものではないと考えていたからである。この様に、ハイエクの自然科学と社会科学の方法論的区別は、元々彼の自由論と

密接に関連しているのである。

しかし、このハイエクの社会科学方法論に対する主張は、フリードマンを初めとする実証主義の伝統を引くシカゴ大学の人々とは同じではなかった。シカゴ学派の人々にとって経済学は自然科学と並び立つ「科学」であるべきであり、その科学性を支えるのが仮説の実証性であった。フリードマンの有名な著作である『実証的経済学の方法と展開』(1953)とその中に収められている“The Methodology of Positive Economics” 1952がちょうどハイエクが所属した時期に発表されたものであることは偶然ではない。「規範的経済学と経済学の技術とは、実証的経済学から独立ではあり得ない」(Friedman 1953/訳5)とするフリードマンと、

…それらの方程式の体系は、個々の出来事の特異な予測への第一歩ではなく、彼らの理論的努力の最終成果であり、秩序の単なる一般的性格の記述にとどまる。われわれは、特殊な条件下でその秩序を見出すであろうが、しかし、その一般的性格の記述をその秩序の特異な表現の予測へとは決して変換できない。(Hayek 1964 [1967], 36/訳131)

とするハイエクの隔たりが小さくないことは明らかであろう。フリードマンは対象が経済社会であっても、それは明示的な知識でもって確認できるものでなければならないとした。このフリードマンの方法論は、後にサミュエルソンやクラップホルツ＝アガシが、仮定—仮説—検証の三要素間にねじれがあることを指摘したが、現代経済学にとってはいまなお記念碑的な意味を失っていない<sup>7)</sup>。

フリードマンは、ハイエクの経済理論だけでなくケインズ理論に対しても早くからきわめて批判的であったが、ハイエクの資本理論とケインズ理論への批判の性格ははっきりと異なる。たとえば、ケインズ型の消費関数はフリードマ

ンが批判した一つのポイントだが、フリードマンは、ケインズ理論が「非科学的」であるとは考えない。なぜなら、それは「実証研究によって否定できる」からである。これに対して、ハイエクの資本理論は、そもそも実証的に検証されることを意図して作られていないし、実際に構造的に検証することができない。フリードマンが、ハイエク理論をあれほどはっきりと無視したのは、単に理論的な破綻というだけでなく、それが科学的性格を備えていないと考えたからであった。

他方、ハイエクの側からみると、シカゴ学派の実証主義は、いささか古くさい議論に聞こえただろう。彼が学生時代を過ごしたウィーンはまさに論理実証主義の隆盛期であり、実際彼が作った研究サークル *Geistkreis* のメンバーであったフェリックス・カウフマンは、シュリック・サークルにも所属していたし、両グループの間には密接な交流があったからだ。しかも、ハイエク自身がカール・ポパーの理解者でもあり、ウィーン学団の批判者でもあった (Hayek 1994)。そもそもハイエクは、学生時代にエルンスト・マッハの認知心理学に傾倒していたこともあり、マッハの経験主義についても熟知していた。その意味でハイエクにとって素朴な実証主義を標榜するシカゴ学派の主張は旧態依然とした考えのように見えた。ハイエクの社会方法論に対する懐疑は、そういった実証主義を乗り越えるところから出発していたのである。

だが、このハイエクの方法論的態度も、ミーゼスらの厳密な先験主義と比べれば、むしろ折衷的であったとも言える。先験的な理論的枠組みの意味を最大限に評価するミーゼスらの立場と比べれば、ハイエクは検証も反証もできない領域の存在と重要性を強調しながらも、可能な範囲での実証研究に意味があることを否定しない。これは、ハイエク自身が、1920年代にオーストリア景気研究所に所属し景気統計のレポート作成に関わっていたこと、その経験が彼の貨

幣的景気変動理論に少なからず影響を与えていたという経験が関わっている。ハイエクはそこで得た経験的知識を、彼が学んだオーストリア学派の伝統的な理論およびそれを元としたミーゼス-ヴィクセルの経済理論の中で説明しようとしたが、それが『価格と生産』であった。きわめて抽象的で実証性に乏しい資本理論に立脚しながら、景気循環という定量的に測定される現象を説明するという形こそハイエクが理論経済学者時代に採用した方法であった。その意味では、ハイエクの中にシカゴ学派の実証主義と部分的であるにしろ折り合う余地があったということが出来る<sup>8)</sup>。

ただ、ハイエクは、社会科学において、単純な因果関係の存在を仮定した実証主義が網羅できない複雑な現象の研究にまで経済学が進むことの重要性を強調していた (Hayek [1964] 1967)。したがって、社会科学の「科学性」を仮説の予測力で保証しなければならないとするフリードマンの方法論は究極的には受け入れがたかったと思われる。ハイエクとフリードマンの方法論の対立は、簡単に言えば実在論的立場を採るハイエクと実証主義を採るフリードマンの違いであろう。この違いは、彼らの経済理論にかんしても指摘することができる。ハイエクもフリードマンも、一般均衡論を否定しないが、それとマクロ経済学との関係は大きくことなる。ハイエクが『資本の純粹理論』で行ったのは、いわゆるマクロ経済学のミクロ的基礎付けであった。この『資本の純粹理論』が、実はケインズの『一般理論』批判としての性格を持つことはあまり知られていない。また、他方でハイエクが「経済学と知識」などでワルラス的一般均衡理論に対して批判をおこなった点のみがクローズアップされる。だが、『資本の純粹理論』の中で明確に宣言されているように、ハイエクが経済理論の中で採用した方法は、一般均衡理論の異時点間均衡への拡張であった。実際には観察することが難しい資本投入と産出物の対応

関係を定式化し、資本理論を再構築し、その上で景気変動を考察しようとしたのである。

他方で、フリードマンも一般均衡理論を否定するわけではないが、それは「議論の前提」であり、それ自体が深く考察されるわけではない。理論はあくまで仮説であり、収集可能な客観的データと対照できる形になっていることが唯一の条件である。フリードマンもミクロ的基礎付けを明示的に否定しているわけではないが、それが検証可能な形になっていない理論は彼の科学的基準を満たさなかったのである。

このようにハイエクの实在論とフリードマンの実証主義という方法論的相違は、単に二人の対立に留まらず、マクロ経済学の誕生とそのミクロ的基礎付け、主観主義と客観主義という現代経済学の発達史にも位置づけられる論点である。ただし、本格的なミクロ的基礎付けの議論は、さらに四半世紀ほどたってルーカスやマンキューらの登場を待たなければならなかった。

ハイエクは、フリードマンを「敵に回したいとは思わない」と言いながらも、次の様に回想している。

ご承知のように、私が公的な場でしばしば、もっとも後悔していることの一つはケインズの理論を批判する仕事を再開しなかったことだ、と言ってきました。しかし、ミルトンの『実証的経済学の方法と展開』を批判しなかったことについても同じことがいえます。あれはかなり危険な本なのです。(Hayek 1994, 145 / 訳 187)

この批判はハイエクが晩年になって強く感じるようになったシカゴ学派との相違を象徴している。この言葉は、先述したように自然科学と同じ意味で「科学的」であろうとする結果、そこからもれてしまう様々な要素を排除してしまう行為が、合理主義的アプローチと同じく、社会の存立基盤を捉えられないとする彼の考え方に

基づいて発せられたものと解釈すべきであろう。

だが、逆に言えば、この一節は、社会思想委員会のセミナーの席上でハイエクはフリードマンを正面から批判することがなかったことを示唆している。当時、フリードマンらと正面から対立することがなく、実証主義との間に一定の妥協の余地を持ったことが、この時期の研究の集大成である『自由の条件』にも特徴的な外観を持たせることになった。

本来、方法論的違いは、それに立脚する社会科学の性格を決め、そこから導き出される含意を差別化する。ハイエクは、この当時のシカゴ学派の経済学者がみな統計的集計量に依存する「マクロ経済学者」であったことを指摘する<sup>9)</sup>。マクロ経済学批判は、主にハイエクがケインズ経済学の問題を指摘するとき用いたものだが、同じ議論が同様にケインズの批判者であったシカゴ学派にも向けられていることは興味深い。言い換えれば、ハイエクの目から見れば、政府干渉に対するシカゴ学派的な批判は方法論的に間違っているだけでなく、ケインズ経済学の誤謬を繰り返す危険性をはらんだ議論なのである。次は、異なる方法論が最終的にどのような異なる自由主義を生み出したのかということを見てみよう。

#### IV 自由主義論の形成

ハイエクは、シカゴに移る直前にサイモン・クズネツ (Simon Kuznets) に宛てた手紙の中で、到着後最初のセミナーでは、「交換的正義と分配的正義」および「フランス革命の平等主義」について語るつもりであることを述べている (Hayek 1950)。このことから推測すると、自由主義研究および福祉国家批判がシカゴでの中心的な仕事になるはずであった。ところが、先述したように、シカゴ大学滞在前半期のハイエクの仕事の重点は主に経済学方法論に集中したものであった<sup>10)</sup>。したがって、自由論に対す

る本格的な研究への着手は1950年代後半になってからようやく始まった。

フーバー協会が所蔵する資料の中に「作業計画のメモ1955年11月」と題した資料が残されている。これは彼が妻ヘレネとともに過ごした6か月間の地中海旅行の後に書かれたものであると考えられる。その内容をまとめると次のようになる。

- (1) “The Constitution of Liberty”と“Greater than Man: The Creative Powers of Free Civilization”と題された2冊の書籍を執筆すること。
- (2) 認知哲学に関する一連の論文を書くこと。“Systems within Systems”に詰め込もうとしたがうまくいかなかった内容を“Degree of Explanation,” “The Causal Determination of Purpose,” “The Limits of Communication”という3本の論文にまとめる。
- (3) リカードウの思想的発展の論文を *Economic Journal* 誌に書くこと、J. S. ミルのイタリア、ギリシャ、シシリアへの旅の最中の手紙を編集すること、そして“Economists and Philosophers”と題した論文をまとめること。
- (4) 経済学の技術についての仕事を放棄しないこと。次のタイトルは“A Grammar of Economic Calculus”とすること。さらに以前からの仕事を引き継ぎ、“Money as an Intellectual Adventure”という本を書くこと。(Hayek 1955)

このうち、(1)は『自由の条件』(1960b)として出版されている。ただし、2本目のタイトルは、1958年にフェリックス・モーリーが編集した本の中で論文として発表され、その後『自由の条件』の第2章に用いられているので結局、1冊にまとめられたと考えられる。(2)に関し

ては、既に当時 *British Journal for the Philosophy of Science* に投稿中であった“Degree of Explanation”を除くと、これらのタイトルでは論文は刊行されていない。(2)と(4)の企画は縮小されて、*Studies in Philosophy, Politics and Economics* ([1964] 1967)と *New Studies in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas* (1978b) という2冊の論文集にまとめられた。

「作業計画のメモ1959年11月」では、1955年のプランが修正されている。上記(2)に関しては、この時点で“On the Boundaries of Knowledge”という書籍にまとめる計画があったようだが、これも実現していない。(4)については、新しいアイデアに沿った経済理論は不可能であること、単に貨幣経済に沿った経済計算の概略を示すに過ぎないことを告白している<sup>11)</sup>。むしろ、ここでは『自由の条件』に含まれた各種の議論(理想的な憲法、ホイッグ保守主義、ダーウィン以前の進化論等)の研究が重視されている。

ここで問題になるのは、方法論研究に費やされた前半期と、自由主義研究に費やされた後半期の関係およびシカゴ学派との関係である。すでに見たようにハイエクは、自然科学の方法論と社会科学の方法論を区別し、自然科学の実証主義が社会科学では適当ではないことを指摘していた。これは、ハイエクとシカゴ学派の方法論の間の根本的な違いの原因となっている。

ちなみに、ハイエクとシカゴ学派という構図は、実は初期のモンベルラン協会の構成メンバーのそれと同じであった。ハイエクは、モンベルラン協会の当初の「メンバーの大多数が、ミーゼスの弟子か、ナイトの弟子である」(Hayek 1957)ことを述べている。だが、経済政策の目標を定めるためには、科学的アプローチではなく、政治や美意識や倫理といった複層的な観点からの価値を定式化することが必要であるとするとナイトに対して、フリードマンらの自由主義は、資本主義の倫理的問題は、経済成

長の中で解決されるとするマーシャルの立場に近い<sup>12)</sup>。これは、フリードマンの世代とナイトらの世代にも断絶があることを示唆しており、上述のハイエクの言葉は単に実際の間人関係を述べたに過ぎないことがわかる。

ハイエクとシカゴ学派の断絶にもかかわらず、フリードマンは『自由の条件』に限って言えば、ハイエクがシカゴ学派に歩み寄っていることを指摘している。

『自由の条件』はハイエクのシカゴ学派への墮落を物語るものです。それは絶対的な経験に拡張的に言及した彼の唯一の書籍なのです…『自由の条件』で彼がカバーしようとしたテーマの範囲と彼がそれについて進めたものを見ればわかるように、それは彼の他のほとんどの書籍とは異なるものでした。…これは私の考えですが、ハイエクはシカゴに来なければ『自由の条件』を書くことはなかったでしょう。(Ebenstein 2003, 141)

確かに、『自由の条件』第3部「福祉国家における自由」では、福祉政策のいくつか（失業対策、労働組合、雇用、課税と再分配、住宅政策、農業と天然資源保護、教育・研究）などの具体的な研究が採り上げられその批判がおこなわれている。この形式は『法・立法・自由』では見られず、また労働組合批判と金融財政政策を除けば、他の著作の中でも、ハイエクが具体例を挙げて福祉国家批判をおこなうことは少ない。このスタイルは、伝統的なオーストリア学派の方法よりは、むしろフリードマンの『資本主義と自由』や『選択の自由』に近いとも言える。

だが、形式的な類似性はともかく、両者の自由主義は同じものだったのだろうか。後に刊行される『法・立法・自由』や『致命的な思いあがり』（1988）はひとまずおくとしても、フリードマンが特異な書と評する『自由の条件』の中で主張された自由主義は、シカゴ学派のそれと

どの程度等しいものかを検証する必要があるだろう。

わかりやすい共通の主張もある。たとえば、企業倫理について述べた主張の中で、フリードマンは、

市場経済において企業が負うべき社会的責任は、公正かつ自由でオープンな競争を行うというルールを守り、資源を有効活用して利潤追求のための事業活動に専念することだ。…企業経営者の使命は株主利益の最大化であり、それ以外の社会的責任を引き受ける傾向が強まることほど、自由社会にとって危険なことはない。(Friedman 1962, 133 / 訳 249)

とする。

これと同様にハイエクは、次のように述べる。

私の主張は、もし企業の影響力を、それが有益な範囲に効果的に抑制したいと思うなら、企業の活動をこれまでよりも厳しく、株主によって経営者に付託された資本を有利に活用するという課題に専念するように制限しなければならないということである。企業がその資源を資本にたいする報酬の長期的極大化以外の特定の目的のために使うことを許し、ときには強制さえする現代の傾向は、彼らに望ましからざる社会に危険な影響力を与えるもので、昨今流行している「社会的配慮」によって経営方針が導かれるべきだとする議論ももっとも望ましからざる結果を生み出す可能性がある、というものである。(Hayek [1960a] 1967, 300 / 訳 139)

ハイエクもフリードマンも、市場社会において、企業は純粋に利益を追求し、それ以外の価値を追い求めるように求められるべきではないことを主張する。

より一般的には、フリードマンが頻繁に採り

上げる選択の自由，はハイエクも議論として同意しているし、『自由の条件』の中で見られる政府干渉が不要であること，しばしば深刻な政府の失敗を引き起こしていることの例示では，ハイエクはフリードマンとほぼ同じ見解を採っている。ハイエクとフリードマンは，市場における個々の経済主体自体は，その経済的目的に対して合理的であるべきとし，それに対する経済外的な目的や価値観からの干渉が排除されるべきであるという点では一致する。

このような共通点に対して相違点はどのような形で現れているだろうか。特に，実証できない領域にまで社会科学が進まなければならないとするハイエクの方法論的主張はどのように反映されているだろうか。もっともはっきりとした違いは，市場経済の中で生じてくる様々な問題が，経済成長によって解決できるかどうかということの両者の見解の中に現れている。シカゴ学派の回答が経済成長のみがその完全な解決の可能性を秘めているとするのに対して，ハイエクは部分的にはそれで解決できるが，完全ではないと考える。貧困の問題は経済成長によって解決可能であるし，技術革新の進展によって実際にわれわれの生活は改善されてきた。しかし，いくつかの問題は未解決のまま，しかもそのいくつかのものはかなりの不満を抱えたまま残される。しかし，政府による市場経済への介入はそれらの市場経済の問題よりも深刻な帰結をもたらすが故に，われわれはそれらの問題を甘受しなければならない。しかも，政府に市場への干渉を譲り渡してしまった結果失われる損失は常に曖昧であり，認識が難しい。だが，それはひとたび失われてしまうと二度と取り返しのつかないものであるという。

ハイエクにとって，自由社会の利点は基本的に曖昧であり，常に経験的だけでなく，場合によっては先験的にも，その利点を確証できるとは限らないものである。これはハイエクが功利主義という立場を採らず，その基礎に社会進化

論を据えたこととも関係している。何者も社会進化の帰結を事前に予測することはできず，事後的にもその進化が良いものであったかどうかを評価することはできない。単にその社会の人口が増加したか否かで，その社会が，置かれた環境がもたらす淘汰圧に対して中立的であったか否かが判断できるだけである<sup>13)</sup>。このように，ハイエクが，社会進化論を彼の自由論の基礎に据えたのは，彼の方法論的な研究の帰結であったとすることができる。

表1は社会思想委員会でのセミナー *Scientific Method and the Study of Society* で配布した資料の一つである。おそらくハイエクが社会科学と生物学の対照がどのようなものであるかを考えていたことを示唆するもっとも古い資料であろう。特徴的なのは，ハイエクが，生物進化に関しては単位を種やディームに置いていたのに対して，社会では個人や企業のような個体に置いていたことにある。『自由の条件』の中でハイエクは，社会科学の中の進化概念が生物学とは異なること，そして社会進化において個体の盛衰および個体間の知識の伝達が重要な役割を果たすことを指摘した。さらに個体の相関の結果として生じる秩序の自由な社会における役割が強調されている。本書において自然選択は働いているだろう機能として暗黙のうちに仮定されてはいるが，あまりおもてだった働きをしていない。

表1を見る限り，1952年の社会進化概念は『自由の条件』に近いものと言える。

残念なことには，後になって社会科学は自らの領域でこれらの最初の成果にもとづかず生物学からの考え方のいくつかを逆輸入して，「自然選択」，「生存競争」，および「適者生存」などの概念を持ち込んだが，それは適切なものではない。というのは，社会進化における決定的な要素は個人の物理的そして遺伝的な属性の淘汰ではなく，成功している制

表1 社会科学と生物学の対象 (Hayek 1952)

組織化の水準		記述法		動態		遺伝	
第1水準	第2水準	最高段階	永年変化と再生産	持続	永年変化	生産	側面
生物界	World	生物地理学	古生物学	生物学的進化理論			行動遺伝
	Local	記述的	群生生態学	動的群生生態学			
社会	伝統社会 人間国家 特殊集団	文化人類学	歴史	社会学 経済学	歴史哲学	文化的断絶	
	本能社会	文化記述的	個生生態学	動的個生生態学			
異種交配集団	種集団 種 亜種 ディーム	分類学	系統発生	進化理論		科学種	集団遺伝学
				静 態	変 形		
個 体	コロニー個体	生体構造	記述的発生理学	器官の生理学	発達の生理学	再生産の生理学	発達遺伝学
	器官						
細 胞	組織細胞	組織学	差異化	一般生理学	差異化の 生理学	細胞分裂の 生理学	生理遺伝学
	細胞構成	細胞学					
遺伝子	連動システム	細胞遺伝学		持続の生理学	突然変異 の生理学	複製の生理学	遺伝理論
	遺伝子	遺伝化学	遺伝の本質				

度や習慣の模倣であるからである。これも個人や集団の成功を通して作用するけれども、あらわれてくるものは個人の遺伝的な属性ではなく、考え方と技術、要するに学習と模倣によって伝えられる文化的遺産全体なのである。(Hayek 1960b, 59 / 訳 86)

そして、表1が書かれた時期から考えても、自生的秩序論が社会科学独自の進化論であるとするハイエクの主張は、自然科学と社会科学の方法論的な違いの強調と関係していると考えerことは不自然ではない。

ここで注目すべきなのは、表1中で「生物地理学」、「古生物学」に対して「文化人類学」、「歴史」が置かれ、「生物学的進化理論」の対照として、「社会学・経済学」および「歴史哲学」が挙げられていることである。生物学の進化理論が「生物地理学」、「古生物学」によって検証できるのに対して、「文化人類学」、「歴史」は「社

会学・経済学」および「歴史哲学」で検証できるかどうかは明確ではない。文化人類学や歴史の実証主義的方法は、社会学はともかく、突き詰められるほど(まさにシカゴ学派社会学が示したように)、一般性を旨とする経済学とは断絶することになる。

ハイエクの進化論に基づく自由論のもう一つの特徴は、やはり『自由の条件』の中ではじめて本格的に展開された自生的秩序論である。人々の行為の相関の結果現れる行為のパターンは、人々の予測の中に組み入れられやがてルールとしての性格を持つ。このルールは人々の認知と行為の繰り返しによって維持されているため、それが必要とされている間は、人々の日常に安定と発展をもたらし、それがなくなれば消えていくことになる。

他方、経験主義的な進化論的な伝統にとっては、自由の価値は主に設計されないものの成

長のために自由が提供する機会にこそあるの  
 であって、ある自由な社会が有効に作用する  
 のは主としてそのように自由に成長した制度  
 の存在によるのである。…逆説的なように見  
 えるかもしれないが、自由な社会の成功は常  
 にほとんどの場合、伝統に制約された社会で  
 あるというのがおそらく本当であろう。  
 (Hayek 1960b, 61 / 訳 90)

自生的秩序は誰が設計したものでもないが、  
 日常の中での進化するものであり人が設計でき  
 ないような隅々まで人々の行動にかかわること  
 になる。

ハイエクのいう社会進化の議論は、部分的に  
 は歴史や人類学の手法によって検証することが  
 できるだろう。だが、自生的秩序の多くが、ハ  
 イエクが指摘するように、よくわからない知識  
 に基づいたものである以上、経験的な検証には  
 限界がある。しかし、先験的にこの秩序の存在  
 と意義を認めてしまうことで、われわれの社会  
 の様々な制度の役割を説明することができる  
 し、自由社会の基礎とすることができる。もし、  
 フリードマン的な実証主義に基づかなければなら  
 ないとすれば、ハイエクの自生的秩序論は社会  
 科学とはなり得ないだろう。

加えて、市場経済が自生的であるとはいえ、  
 ルールによって秩序づけられなければならない  
 とするハイエクの考え方は、市場に選択肢が存  
 在すれば、それ以外の何者も必要ないとするシ  
 カゴ学派の思想とは異なる。フリードマンらの  
 思想は、自由市場の意味を十分に認めながらも、  
 政策目標の設定には市場の外部に倫理的な価値  
 観を必要であるとしたナイトのようなシカゴ学  
 派の先達たちとの思想とも異なっている。むしろ、  
 フリードマンらの思想の特徴は、主体の選  
 択行動以外の何ものも必要としないことが自由  
 市場の優位性であり、ナイト流の自由主義を払  
 拭したところにある。他方で、シカゴ学派の経  
 済学者にとって、市場がルールによって支えら

れる必要もなかったのである。シカゴ学派に  
 にとって必要であったのは、市場での人々の活動  
 を阻害しようとする外部の勢力を抑制するため  
 のルールであった。

以上のことから、『自由の条件』は、いくつ  
 かの表面的な部分で、フリードマンを初めとす  
 るシカゴ学派の自由論と類似しているが、その  
 基礎として進化する秩序概念を採用したことを  
 みれば、シカゴ学派の議論とは異なっているこ  
 とがわかる。それではこのような構造の違いが  
 両者の自由への考え方にどのような違いをもた  
 らしているのだろうか。

バリー (1986) は、シカゴ学派の自由主義が  
 その正当化を経験によっている限り、それには  
 限界があることを指摘している。つまり、過去  
 に行われた市場への政府干渉が失敗であったこ  
 とをどれだけ示してみても、それはすべての政  
 府干渉が失敗することを示し得ないという帰納  
 法に対する批判が成り立つ。バリーは、シカゴ  
 学派の自由主義は根拠が希薄であり、結局オー  
 ストリア学派のようにアプリオリな議論が必要  
 であると主張する。たしかに、シカゴ学派の自  
 由論によれば、批判の対象(政府の失敗)が無  
 くなれば、後は自由市場の効能をある種の楽観  
 主義に基づくしかない。

実際、冷戦終結後の世界に対して、経験主義  
 的な自由論は語る事が以前と比べると大幅に  
 少ない。グローバリズムの進展とその弊害は、  
 一方的に語る事ができないほど、批判の軸が  
 明確ではない。それに対して、ハイエクの自由  
 論は社会構造についての分析を包含しており、  
 自由社会そのものの存立要件を先験的に説明す  
 るため、批判の対象が消滅しても一定の意義を  
 維持し続けることができる。

論点を整理しておこう。フリードマンらのシ  
 カゴ学派は、市場の重要性を認めながらも、政  
 策目標の規準となる価値規範を市場外部に必要  
 とするナイトらの主張を脱し、市場そのものの  
 自立性を主張する。ルールは市場への恣意的な

干渉を排除するために用いられる。フリードマンのルール主義は、常に拡大する傾向にある政府の力を抑制するための手段である。これに対して、ハイエクは市場の自立性を主張するが、それは、人々の活動の結果、自生的に生まれたルールが人々の行動を内生的に制限するからである。ハイエクは「法の下での自由」を強調するが、自由な活動にはそれと両立するルールが必要であると考えている。つまり、自由市場が成立するためにはその基礎となるルールが必要である。同じ自由、同じルールでもハイエクとフリードマンの概念の違いは明らかだろう。

この自由とルールに対する考え方の違いは、両者の貨幣政策に対する見解の相違に、より象徴的に現れている。ハイエクは1950年代の研究計画の中で、貨幣についての著作を執筆することを考えているが、それが形を変えて『貨幣発行自由化論』（1976）として現れた。貨幣発行の民営化論に対してフリードマンは「現実的ではない」とし、それに対してハイエクは「市場を信じていない」と返している。極端に言えば、フリードマンの道具主義は、目に見える指標の改善に有利な手段として自由市場を支持しているといえる。それは翻れば、不干渉以外の方法でより効率的な改善が可能であればそれを否定する理由はないことになってしまう。

他方でハイエクの主張は、貨幣に対する政府の独占を排除すること自体が目的である。言い換えれば貨幣発行に対する自由の保持そのものが目的であり、それを他のものに置き換えることはできない。ただし、貨幣発行の秩序は競争過程の中から生まれてくるルールによって支えられることになる。ハイエクの自由論は、市場がルールに支えられていることを認めながらも、そのルール自体が競争内部から生まれてくることを知っており、それゆえ市場外部からの判断や抑制を必要としないのである。

フリードマン的なマネタリズムを一時は信奉した実際の政策の現場では、その後インフレあ

るいはデフレを職人芸的にコントロールする議論が主流になってしまったことは、現在の各国の中央銀行の傾向をみても明らかであろう。これはフリードマン的なマネタリズムの否定というよりも、フリードマン自身の議論の中に恣意的な政策を許容する余地があったのだと考えることもできる。ハイエクは、フリードマンの考え方の中に、方法論に留まらず、道具主義が濫用されてしまうことを感じていたからこそ、フリードマンの方法論に関する著作を「危険な本」であるとしたのである。

結論として、方法論的不一致を抱えたまま成立したシカゴ学派の自由論とハイエクの自由論は、互いに影響を受けたかもしれないが、本質的には別物であったと考えるべきであろう。フリードマンらの議論が、経済学の中に留まっていたことと、ハイエクが経済学を超えたより広い分野に向かったことの違いもまたこれと関係している。ハイエクは実証主義的な制約を持たなかったからこそ、彼独自の自由論へと進み得たのである。

## V ま と め

ハイエクは、1962年4月25日にシカゴを離れフライブルクへと向かった。離米の理由は、彼のアメリカでのスポンサーであったヴォルカー財団が破綻したためであった。その一か月前、ネフはシカゴ大学に対して、ハイエクの雇用を3年間延長するように申請したが、シカゴ大学が提示した条件はフライブルク大学のそれを上回ることはなかった（Nef 1963 a, b, c）<sup>14)</sup>。だが、1950年代と1970年とを比べると、フライブルク時代のハイエクの研究活動が生彩を欠くことは誰の目にも明らかであろう。シカゴ時代のハイエクの生産性の高さはその多くの優秀なライバルの存在を抜きにしては語れない。さまざまな不一致点をもちながらも、ハイエクとシカゴ学派が知的にあるいは精神的に刺激しあっていたことは明らかである<sup>15)</sup>。

本稿では、ハイエクとシカゴ学派の関係を、方法論と自由論の観点から概観した。1950年代は、ハイエクがシカゴ大学に在籍し、またモンペルラン協会でも積極的に活動していたことから、ハイエクとフリードマンらシカゴ学派の自由主義者たちがもっとも接近した時期であると考えられる。だが、実際には、両者の方法論的な溝は埋まることが無く、それに基づいた自由論も似て異なるものであった。本稿では、この両者の埋められない違いを明らかにした。

フリードマンの道具主義は、少なくとも当時経済学が自然科学的な装いを纏うために必要であったが、その後のクーンやラトシュ、ファイヤアーベントの科学哲学の中では、反証可能性が必ずしも科学と非科学の境界を明確にするわけではないことが明らかになった。現在の主流派経済学の方法論に対する姿勢はラトシュ的であるとも言え、フリードマン流の素朴な実証主義からは距離を置きつつあるように見える。

なお、今回は触れることがなかったが、やはり1950年代に発表された『感覚秩序』に代表される認知心理学に関する研究は、意識の秩序と社会的秩序の関係を考える場合、きわめて重要である。人は社会の秩序を、自らの認識枠組みを構成する場合に利用し、行動する。逆に社会秩序は人の行為の結果として生成する。この両者の共進化の構造こそがハイエクの人と社会の関係を示すものであり、彼が自由の条件として秩序の進化に信を置く理由でもある。おそらく、この点を強調すればよりシカゴ学派との違いは明確になったと思われる。

本稿では、1960年代のハイエクのシカゴ大学所属時期の活動を採り上げながら、彼とシカゴ学派の方法論と自由主義の違いを明らかにした。だが、逆に言えば、ハイエクとシカゴ学派の自由論は根底の部分ではほとんど関連性がないにもかかわらず、共に自由主義者として歩

同じくしえたのは、両者が導き出した表面的な帰結が妥協可能なものであったことを示している。

しかし、それは、社会主義やケインズ主義という明確な批判対象が確固たる力を持ち、それに対抗する力を結集しなければならないという冷戦構造下であるという環境的要因に大きく寄っていたことも理解すべきであろう。1990年代以降、それまでの明確な対立軸が消滅し、自由主義体制内での競争がほとんどの国で主流となった現在、ハイエクとシカゴ学派の間の自由に関する見解の質的な差はもっと採り上げられるべきだろう。たとえば、グローバリゼーションの進展によって、国際的な資本の移動が活発化し、旧来の政府の貨幣政策を無効にするほどの貨幣供給が行われている。いまや実物経済に対して大きな影響力を持つ貨幣の主な供給者は政府ではなく投機的資本となった。このような状況の中で自由市場の意味を考えると、ハイエクとシカゴ学派の自由主義観の違いは決定的な意味を持つと思われる。この意味でも、このテーマに関するより精緻な検討が必要とされている。

江頭 進：小樽商科大学商学部

#### 注

- 1) この他にハイエクの方法論を取り扱ったものとして、橋本(1991)が挙げられる。またハイエクの方法論の深層を明らかにした上で、彼の自由論の批判者の解釈の誤りを的確に指摘したものとして渡辺(2006)は必読であろう。
- 2) ハイエクが経済学部から招聘されなかった理由として、かつてはナイトが反対したという説が語られてきたが、エーベンシュタインは、フリードマンの回想として、(1)そもそも、当時の人事は完全な内部人事であったこと、(2)ハイエクの理論経済学での業績である『価格と生産』はメンバーの関心外であり、『隷従への道』に至っては審査対象にすらならなかったことを指摘している(Ebenstein 2001, 175)。

- 3) 後のシカゴの事業家で慈善家 William Wood Prince と推測される (Prince n.d.).
- 4) ただし、この当時はともかく、ルーカスのようなその後のシカゴ学派の伝統を引く人々まで含めると、必ずしもシカゴ学派の人々がハイエク経済学の全面否定をしているとは言えない。
- 5) ハイエクはミルの文献を LSE 時代から渉猟していた。その結果としてまとめられたのが、*John Stuart Mill and Harriet Taylor*, 1951 である。
- 6) この批判は、ハイエクの認知心理学研究で採った立場と同じである。ハイエクの『間隔秩序』は、当時の主流であった行動主義心理学への批判として現れたコネクション主義理論の先駆けであった。人間の意識の発生構造を所与とするのではなく、必ずしも観察可能ではない（一部は可能である）脳の活動として実在論的に考察していくというアプローチは、ここでの主張と平行している。ただし、同時期に刊行された『科学による反革命』の中では、社会科学者は人間心理の研究まで立ち入る必要はないとしている。科学研究の棲み分けと専門化にかんするハイエクの考え方にはまた別の考察が必要だろう。
- 7) この主張は、後の講演の中の同じく「複雑現象の理論」という同じタイトルを付けられた節の中でもシカゴ的実証主義への批判という形を採りながら、繰り返されている。「…測定することの意味が明らかでない分野で測定に固執することは、間違いなく科学的とは言えない。ミクロ経済学を害してきたのは、根本的により単純な現象を扱う物理学の方法を模倣することで、偽りの厳密性を追求してきたことである。…いうまでもなく、それがマクロ経済学と呼ばれるようになったものなのだ」(Hayek 1978a/ 訳 101)。
- 8) このハイエクの折衷的態度を、ローソン (Lawson) は実証主義的主観主義とし、フリートウッド (1995) はハイエク II の方法論的特徴とする。彼らは、これを経てハイエクが批判的実在論が支持する方法論と近い立場を獲得していったとする。
- 9) シカゴ学派の現代の継承者がフリードマンらとは異なりマクロ経済学のミクロの基礎付けを強調することはよく知られている。加えて、ハイエク自身が、スティグラーやベッカーといった人々がフリードマンとは異なることも認めており、シカゴ学派について語る場合「誰がシカゴ学派なのか」という問題は常について回る。しかし、フリードマンが当時もっとも影響力の強いシカゴ学派の経済学者であったことは広く認められていることであり、フリードマンの道具主義をシカゴ学派の代表的な方法論と認めることはここでは問題ないと考えられる。
- 10) しかし、1953 年のフリッツ・マハループへの手紙の中では既に『隷従への道』の拡張の意志を伝えている。
- 11) この研究は部分的には『貨幣発行自由化論』(1976) の一部となっている。
- 12) このナイトの特徴は『自由の条件』に対する彼の辛辣な批判からも理解できる (Knight 1967)。
- 13) ハイエクの社会進化論のうちこの点については、*The Fatal Conceit*, 1988 の中でより明確にされている。
- 14) ハイエクは同時期にウィーン大学からも教授職での招聘を受けていたが、結局条件のよいフライブルクを選んだようである (Nef 1963 a)。
- 15) ハイエクはこの生産性の低下を、フライブルクの医師に誤って糖尿病の治療を受けたためであると説明している (Hayek 1994, 131-32)。

#### 参考文献

- Barry, N. P. 1986. *On Classical Liberalism and Libertarianism*. London: Macmillan. 足立幸男他訳『自由の正当性』木鐸社, 1990.
- Butos, W. N. 1985. Hayek and General Equilibrium Analysis. *Southern Economic Journal* 52:332-43.
- Caldwell, B. 1988. Hayek's Transformation. *History of Political Economy* 18 (4): 363-79.
- . 2004. *Hayek's Challenge*. Chicago: Univ. of Chicago Press.

- Committee on Social Thought. 1950. Committee on Social Thought Tutorial Schedule. Archive of Hoover Institute, Stanford University, BOX 63, Folder 10.
- Ebenstein, A. 2001. *Friedrich Hayek A Biography*. New York: Palgrave.
- . 2003. *Hayek's Journey: The Mind of Friedrich Hayek*. New York: Palgrave Macmillan.
- Fleetwood, S. 1995. *Hayek's Political Economy: The Socio Economics of Order*. London: Routledge. 佐々木憲介・西部忠・原伸子訳『ハイエクのポリティカル・エコノミー—社会経済学』法政大学出版局, 2006.
- Friedman, M. 1952. The Methodology of Positive Economics. In Friedman 1953.
- . 1953. *Essays in Positive Economics*. Chicago: Univ. of Chicago Press. 佐藤隆三・長谷川啓之訳『実証的経済学の方法と展開』富士書房, 1977.
- . 1962. *Capitalism and Freedom*. Chicago: Univ. of Chicago Press. 村井章子訳『資本主義と自由』日経BP出版センター, 2008.
- Hayek, F. A. 1942-44. Scientism and the Study of Society. In Hayek 1952e.
- . 1950. Correspondence to Simon. Archive of Hoover Institute, Stanford University, BOX 63, Folder 11.
- . 1951. *John Stuart Mill and Harriet Taylor: Their Correspondence and Subsequent Marriage*. London: Routledge.
- . 1952a. Correspondence to Enrico Fermi. Hayek Papers at Archive of Hoover Institute, Stanford University, BOX 63, Folder 13.
- . 1952b. Seminar on Scientific Method and the Study of Society. Hayek Papers at Archive of Hoover Institute, Stanford University, BOX 63, Folder 14.
- . 1952c. Correspondence to Milton Friedman. Hayek Papers at Archive of Hoover Institute, Stanford University, BOX 63, Folder 14.
- . 1952d. Scientific Method, Material. Hayek Papers at Archive of Hoover Institute, Stanford University, BOX 63, Folder 15.
- . 1952e. *The Counter-Revolution of Science: Studies on the Abuse of Reason*. Glencoe: Free Press.
- . 1953. Correspondence to Fritz Machlup. Hayek Papers at Archive of Hoover Institute, Stanford University, BOX 36, Folder 17.
- . 1955. Memorandum on Plans for Work, November 1955. Archive of Hoover Institute, Stanford University, BOX 93, Folder 11.
- . 1956. *The Political Ideal of the Rule of Law*. Cairo: Bank of Egypt.
- . 1957. Opening Address. Archive of Hoover Institute, Stanford University, BOX 62, Folder 3.
- . 1959. Memorandum on Plans for Work, November 1959. Archive of Hoover Institute, Stanford University, BOX 93, Folder 11.
- . [1960a] 1967. The Corporation in a Democratic Society: In Whose Interest Ought It To and Will It Be Run? In *Studies in Philosophy, Politics and Economics*. New York: Simon and Schuster. 古賀勝次郎監訳「民主主義社会における企業—だれの利益のため?」『経済学論集』所収, 春秋社, 2009.
- . 1960b. *The Constitution of Liberty*. Chicago: Univ. of Chicago Press. 気賀健三・古賀勝次郎訳『自由の条件』春秋社, 1986.
- . [1964] 1967. The Theory of Complex Phenomena. In *Studies in Philosophy, Politics and Economics*. New York: Simon and Schuster. 嶋津格訳「複雑現象の理論」『哲学論集』所収, 春秋社, 2010.
- . 1976. *Denationalization of Money*. London: The Institute of Economic Affairs. 川口慎二訳『貨幣発行自由化論』東洋経済新報社, 1988.
- . 1978a. Coping with Ignorance. In *Knowledge, Evolution and Society*. London: Adam Smith Institute, 1983. 尾近裕幸訳「無知への対処」『社会主義と戦争』所収, 春秋社, 2010.
- . 1978b. *New Studies in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- . 1988. *The Fatal Conceit*. Chicago: Univ. of Chicago Press. 渡辺幹雄訳『致命的な思いあがり』春秋社, 2009.
- . 1994. Hayek on Hayek. London: Routledge. 嶋津格訳『ハイエク, ハイエクを語る』名古屋大学出版会, 2000.
- Hennecke, H. J. 2000. *Friedrich August von Hayek: Die Tradition der Freiheit*. Dusseldorf: Verlag Wirtschaft und Finanzen.
- Klappholz, K. and J. Aggasi. 1959. Methodological Prescriptions in Economics. *Economica*, February, vol. 26:60-74.
- Knight, F. H. 1967. Laissez-Faire: Pro and Con. *Journal of Political Economy* 75:783-95. 「自由放任主義」

- 高哲男・黒木亮訳『競争の倫理—フランク・ナイト論文選』所収, ミネルヴァ書房, 2009.
- Nef, J. 1950. Instructional Staff: Committee on Department Social Thought. Hayek Papers at Archive of Hoover Institute, Stanford University, BOX 63, Folder 10.
- . 1963 a. Correspondence to Dean D. Gale Johnson on March 20, 1962. Hayek Papers at Archive of Hoover Institute, Stanford University, BOX 63, Folder 10.
- . 1963 b. Correspondence to Dean D. Gale Johnson on April 2, 1962. Hayek Papers at Archive of Hoover Institute, Stanford University, BOX 63, Folder 10.
- . 1963 c. Correspondence to Dean D. Gale Johnson on April 16, 1962. Hayek Papers at Archive of Hoover Institute, Stanford University, BOX 63, Folder 10.
- Prince, W. W. n.d. The Committee on Social Thought, 1950–1951. Archive of Hoover Institute, Stanford University, BOX 65, Folder 19.
- Rosner, P. 1994. Is Hayek's Theory of Business Cycles an Austrian Theory? In *Hayek, Co-ordination and Evolution: His Legacy in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas*, edited by J. Birner and R. v. Zijp. London: Routledge: 51–66.
- Samuelson, P. 1963. Problems of Methodology: Discussion. *American Economic Review, Proceedings* 53:1164–72.
- . 1965. Theory and Realism: A Reply. *American Economic Review*, September 1964, vol. 54: 736–39.
- Witt, U. 1994. The Theory of Social Evolution: Hayek's Unfinished Legacy. In *Hayek, Co-ordination and Evolution: His Legacy in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas*, edited by J. Birner and R. v. Zijp. London: Routledge: 179–89.
- 黒木 亮. 2011. 「フランク・ナイトの経済学・競争体制批判—シカゴ“学派”再考」, Series: Economic Thought of the “Chicago School” 〈1〉, 『経済学史研究』 53 (1): 21–43.
- 橋本 努. 1991. 「ハイエクの迷宮—方法論的転換問題」『現代思想』 19 (12): 160–79.
- 渡辺幹雄. 2006. 『ハイエクと現代リベラリズム—「アンチ合理主義的リベラリズム」の諸相』, 春秋社.

#### Website

- Hayek, F. A. 1978. Coping With Ignorance, at Hillsdale College as a Part of the Ludwig von Mises Lecture Series. <http://www.hillsdale.edu/news/imprimis/archive/issue.asp?year=1978&month=07>. 尾近裕幸訳「無知への対処」『社会主義と戦争』所収, 春秋社, 2010.

## The Insuperable Gap between Hayek and the Chicago School: Methodology and Liberalism

Susumu Egashira

This paper aims to consider how the Chicago school of economics influenced the economic thought of Friedrich Hayek in his period at the University of Chicago, where he was a follower of the Committee of Social Thought from 1950 to 1962. This period is well known as “Hayek’s transformation”—from a theoretical economist to a thinker of liberalism. Therefore, to understand the development of his thought, it is important to know who influenced him during this period. This paper will explore the relationship between Hayek and the members of the Committee of Social Thought, by analyzing his works, correspondence, and typescripts written during this period.

On the one hand, the similarities and differ-

ences between Hayek’s liberalism and that of the Chicago school are pointed out. Hayek and several economists of the Chicago school were members of the Mont Pelerin Society and were anti-communists. Despite the tendency to place both Hayek and the Chicago school under the general banner of anti-socialism or anti-Keynesianism, they actually diverged widely on points of methodology and liberalism. However, it is an inevitable consequence that different methodologies produce different economics, and the forms of liberalism based on these economics also differ.

JEL classification numbers: B 25, B 41.